

---

# ドラゴンプラネット

級長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンプラネット

### 【Nコード】

N7928Z

### 【作者名】

級長

### 【あらすじ】

プレイヤーがゲームの世界に入るという最新型ゲーム、ドラゴンプラネットオンライン。プレイヤー達の熱き戦いが今、始まる！メビウスリングで連載していた分に大幅な加筆修正を加えて掲載。最新型ゲームを巡り、様々な思惑が錯綜する。

## ブローグ

『私もつとさ、生きたかったなあ……』

『渚!』

一人の少女が血を流して倒れている。胸から赤い液体がとめどなく溢れる。毎日のように見る、昔の夢。そして、いつもここで目が覚めるのだ。

「朝か。寝オチだなこりゃ」

俺はベッドから身体を起こす。布団に入っただけいいが、そのままゲームをして寝オチだ。いくら携帯ゲームのソフトだからって、一日でRPGをクリアすることないだろう。これはナンセンスだ。

「こりゃ、次の実況に使えんな」

俺は配信するゲーム実況動画の心配をした。もともとRPGは実況動画に向かないし、初見プレイでなければ面白みも薄いだろう。しかもファイナルファンタジー?といえど誰もが馴染みの名作、今更紹介動画も必要ないか。

「次はフリーゲームでホラー仕入れるか。そーいや青鬼の新バージョン出てたっけ」

動画の心配も早々に俺は支度を始める。これでも高校生なのだから、学校に行かねばならない。

そうなればこのさして広くない、机とベッドに本棚くらいしかない部屋から出なければ。俺は洗面台に行き、顔を洗って年不相応に白くなった髪の毛の寝癖を直す。シリアルで軽く朝食を取ったらブレザーの制服に着替えて出掛けよう。眼鏡がなければほとんど何も見えないので、眼鏡は欠かせない。

俺はある事情により、ある刑事に育てられた。親の行方は依然として知らない。ただ、確かなのは弟がいるということだ。

「弟、か」

俺は玄関でローファアを履くと扉を開けて家を出る。俺が住んで

るのは自動車と味噌で有名な県、愛知。その愛知の味噌である八丁味噌を名物とする岡崎市のマンションだ。別に味噌臭くないぞ。

弟というワードでつい思い出してしまうことがある。しかし、それをのんびり回想する暇はないようだ。クラスメイトを通学路で拾わねば、あとで白髪を弄られる。

そんなわけで俺はそそくさと階段を降りてマンションを出る。俺の家は10階だが、エレベーターなど待てない。階段を高速で駆け降りる。エレベーターを使わないのは運動不足解消のためだ。ゲーマーは運動不足に陥り易いからな。

俺は楽々とマンションの一階まで降り立つ。昔から続けてるせい  
か息の一つ切れない。他にも最低限の筋トレはしている。

「あら遊人ちゃん。おはよう」

「おはようございます」

マンションから出た俺に声をかけたのは隣のおばさんだ。よくいる主婦みたいで、特徴がないのが特徴といえる。このおばさんは俺を小さい時から知っている。いまだ遊人ちゃん呼ばわりなのはそのせいか。ナンセンスナンセンス。

「最近どう？ 高校とか」

「ええ、特に異常は見当たりません」

「相変わらず回りくどい表現ねえ」

おや、回りくどい表現だったか今の？ 普通に喋ったつもりだが。

「そういえばもうすぐね。渚ちゃんの命日」

「もうこんな時期か……」

渚というのは俺の恩人の名前だ。渚は弟に殺された。俺の弟だ。

「と、こんな話していると遅刻してまう」

「いつてらっしやい」

俺は話を切り上げて出掛けた。朝から湿っぽい話は無しだな。

俺の毎日はこんな感じで幕を開ける。岡崎市という町と共に目覚め、町と共に眠る。こんな毎日がただ続くだろうと、俺は思っている。

ただ、今日の空は雲一つなく、UFOが出たらすぐわかりそう  
な感じがした。宇宙関係の出会いでもあるかもしれない。そんな  
気が薄々していた。

## 1・ログイン！

### 通学路 堤防

「へ？ 遊人、あのゲームやってないの？」

そんな毎日の締めくくりたる夕暮れ時、愛知県内を流れる矢作川の堤防で、うちのクラスの副学級長、上杉夏恋が意外そうな声を上げた。

「やってないもなにも、俺はオンラインゲームしないぞ」

この時間帯となると、帰宅部連中が堤防を通って帰る様子がよく見える。この堤防は俺達が通う私立高校の通学路になっている。俺は帰宅部ではないが、今日は動画を作るために帰る。部活の雰囲気も結構フリーダムだし。

「やってると思ったのに、この廃人ゲーマーは」

「人をなんだと思ってる」

夏恋は毒のある言葉を吐き出す。客観的に見て、夏恋は普通に可愛いが、この点でかなり残念である。

「せっかくだからやってみなよ。このゲーム、通信費無料だし」

「怪しい。明らかに自分が騙された詐欺を紹介して道連れにしようとしてんだろ」

通信費無料という怪しさの隠し味を、俺は見逃さなかった。なにしようとしてんだよこの毒キノコ。モバゲー等無料ゲームでも、パケット代などが別途でかかるのだ。

夏恋は長い黒髪をなびかせ、赤い携帯の画面を見せ付けた。赤くて明らかな毒キノコカラー。カエンタケみたい。

「その名も、【ドラゴンプラネットオンライン】！」

「！ おい、まさかそれ……」

俺は夏恋が自慢げに言ったゲームのタイトル、そして画面のロゴに見覚えがあった。これはたしか、ネットで噂になった奴では？

「そうだよ白髪男！ これは去年に発表された、世界初の全感覚<sup>フルダ</sup>投入ゲームなのだ！」

ドーン、という効果音でも付きそうな勢いで夏恋がいう。夏恋が地味に俺が幼少の頃に失った髪の色素について言ってきたが、完全に思い出した。

「ああ、思い出した。去年、世間を騒がせたあれか」  
フルタイプ  
全感覚投入とは、ゲーム内にプレイヤーの意識を送り込む技術のことだ。

イメージされるのは、よく漫画とかである「ログアウト不能」とか「ゲームオーバー」死とか、そんなやつ。

「たしか、プレイヤーがアバターに入り込んで、まるで自分がアバター自身であるように操作できるとか」

まさに漫画の世界だ。言葉じゃ上手く説明出来ない。

「そうそう、そんなマイナスイメージばっかだから、政府が規制したりね」

夏恋は愚痴りながらイヤホンを俺に突き付けて言った。

「実際にやった方がわかりやすいよ」

「なんだそのイヤホン」

俺には、何故夏恋がイヤホンを突き付けてきたかわからなかった。ただのイヤホンだ。

「全感覚投入ってくらいだから、装置が必要でしょ？ だから、その装置、【ウェーブリーダー】」

「これが？」

夏恋は当たり前前の様に言うが、俺はこんなちっこい装置が全感覚投入なんていうオーバーテクノロジーを引き起こすものとは信じれない。

「私のお古。感謝しなさいよ？」

「お古とか……。これ、高いんじゃない？」

「1000円ポッキリ」

「安過ぎだ！ やっぱ嵌めようとしてんだろ！」

「聞こえていれば、君の生まれの不幸を呪うがいい」

「謀ったな、夏恋！　ってお前は仮面の三倍速か！　たしかに生まれは不幸だけどさ！」

「あ、私ここから電車」

「待て赤い彗星！」

夏恋は駅に駆け込むと、ローカル線の赤い電車に乗って戦闘領域を脱出した。

「……………」

俺は夏恋から渡されたイヤホンを手に、彗星の様に過ぎさった彼女を見送った。

数分後　某マンション

俺の自宅は学校から自転車で行ける距離の場所にあるマンション、その一室だ。

20階建ての内、10階という調度真ん中の階。俺はそこに里親と住んでいる。

「ただいま、って誰もいないか」

俺の里親、直江愛花、姉ちゃんは愛知県警で刑事をしている。この時間、普段は家にいるがでかいヤマを抱えてると数日は帰れない。若いのに大変なこった。まあ、実力があるから仕方ない。

案の定、でかいヤマらしくリビングの机に置き手紙がある。

『遊人へ。俺はちよつと厄介なヤマを抱えてるのでしばらく帰れない。帰ってくるまでに俺に勝てるよう、精進するのだな、フハハハ』

「くそっ、一回勝ったからって調子に乗りよって！　最強なのは俺のエアーストライクだ！」

『俺』って一人称は普通、アニメやゲームの主人公から移るか、友達から移るものと人は言う。大抵の男子は親から『僕』って一人称を無理矢理定着させられるが、途中で『俺』に変わるとも言う



た。

正直、俺の『俺』は母親代わりの姉ちゃんから移ったんだよ。

置き手紙が置かれたのと同じ机には、台座で支えられた2台のロボットがあつた。まるで戦つてる様なディスプレイだが、そういう遊びなのだ。

「しかし、俺から提案してなんだが、プラモでこんな遊びしてんの俺らだけだよな……」

互いに見えない位置でプラモをポーシングし、飾った時にどちらの攻撃が決まったかで勝敗を決する。昨日、俺と姉ちゃんはなかなか決着が着かず、最後は俺のエルストライクガンダム（主人公のロボ）が姉ちゃんのジン（量産機）のマシガンで撃ち落とされた。

「趣味も姉ちゃんから移ったな……」

ゲームにプラモと、これも姉ちゃんの趣味。俺は両親でなく年の近い姉ちゃんに育てられたから、その分影響を受けたんだろう。

「複雑な家庭……」

それはさておき、俺は自分の部屋に向かう。複雑な家庭なのは承知の上だ。

部屋はちゃんと整理してあるので綺麗だ。姉ちゃんの部屋など、とても足の踏み場はない。

机とベッド、ゲームが並べられた本棚にきちつと積まれた完成済みプラモの箱。そのくらいしか部屋にはない。

「さて、本題はこいつだ」

夏恋から貰ったイヤホン、【ウェーブリーダー】。これで【ドラゴンプラネットオンライン】とやらができるらしい。

俺は部屋のノートパソコン（型落ち品。姉ちゃんからのお下がり）をインターネットにつなぎ、そのゲームについて情報を集めた。コイツはインターネットと動画編集に重きをおいてカスタマイズされている。その点だけなら最新型にも引けはとらん。

「まずは攻略ウィキだ」

俺は攻略ウィキを覗くことにした。案の定、ゲームの情報が沢山

だ。

集まった情報を整理すると、そのゲームは名前をDPOと省略されることと、ゲームそのものは3年前に始まったことがわかった。

さらに突き詰めると、DPO（早速使った）は全感覚投入というオーバーテクノロジーで問題となり、与党の渦海党がつい最近まで大々的な宣伝活動を禁じられていたり、無料で出来るのはインフェルノの資金力とゲーム内に看板を立てることで企業から貰える広告料のおかげだそうな。

アバターは男女逆転不能。脳波を読み取り性別を断定するからだ。ずっとゲームで女アバターを使ってる俺にはちとキツイ。

「ニコニコ動画にあるのか？」

俺は動画サイト、ニコニコ動画でプレイ動画を探した。やはり、ゲームの性質上プレイ動画はなかった。代わりにゲーム内のカメラで撮影された動画があった。見る限りPS3にも劣らない高画質だ。よいグラフィック。だが、肝心のプレイは見られない。

このニコニコ動画で俺は『ナイチンゲール』というハンドルネームを使い、ゲームを実況プレイする動画を投稿している。要は喋りながらゲームをプレイする動画だ。

「やはり俺の次なる実況動画を待つ声が……。ん？ メール？」  
そこまで調べたところで、俺の携帯が鳴り響いた。無料で取れる、電流を操る超能力を持った少女が主人公のアニメのオープニングの着メロ。

「この着メロ、姉ちゃんか……」

姉ちゃんしか居ないが、家族のメールには着メロを変えている。メールにはこう書かれていた。

『面白いゲームの情報を拾った。ドラゴンプラネットオンラインというらしい。ログインアプリがコピーインストール出来るから、アプリを入れたSDカードを冷蔵庫に入れておいたよ。やってみたら？』

「なぜ冷蔵庫に入れた！　そしてなにげに弟の背中を押すな！」

SDカードを冷蔵庫に入れるという暴挙にでた姉ちゃんは見ての通りがさつだ。そのせいか、俺の家事スキルが上昇し続けている。姉ちゃんに任せると大惨事確定だからだ。特に料理。冷凍食品くらいならなんとかなるが。

冷蔵庫までSDカードを取りに行き、携帯にカードを入れる。

冷蔵庫の動くん棚の上に、ラップをかけた皿が。その皿にSDカード。

「もし変なゲームだったら、姉ちゃんに責任転嫁だ」

仕方なく、部屋に戻りSDカードに入れられていたアプリでログイン開始。ウェーブリーダーを耳に付ける。

意を決して、ログイン。

「これでゲーム内に閉じ込められて、DPO初の未帰還者になったらどうしよう……」

俺のネガティブな発言は、世界が縦に一回転する感覚に打ち消された。

「で、ここは？」

気がつくと、俺はプレイヤーのマイルームらしき部屋のベッドに寝かされていた。

妙に体が軽く、そして小さく感じられた。髪が長めなのかさらさらした髪が首筋や頬にかかる感覚がある。

まるで自分がアバターであるみたいだ。これが全感覚投入か。アバターにプレイヤーの意識をぶち込むのか。

目の前に青白く光るウィンドウがあり、『ドラゴンプラネットオンラインへようこそ』なんて書いてある。

『まずは鏡で、アバターをチェック！』なんてもついでに書いてあるので、言われた通り、広いだけで何もないワンルーム一人暮らし部屋にぼつんと置かれた大きな鏡に向かう。服屋にありそうな感じの奴だ。

「この部屋、ちょっとSF風味だな」

窓の夜空は宇宙などではない。俺はログイン前の出身惑星選択で、バトルが楽しめると聞いただけで即、【暗黒惑星ネクロフィアダー クネス】を選択したのだ。この惑星は一日中夜だそうだ。

「それより、アバターっ」と

先程から、俺の声がハスキーというか女の子みたいな声だが、これが調べたところによる【ボイスエフェクト】なるものだろうか。アバターの外見とセットになっていて、ランダム生成されるアバターにあわせて選択されるとか。

体をよく見ると、それこそ女の子みたいに華奢だが、気にしすぎだろうか？ ログイン以上に意を決し、俺は鏡を見る。すると予想通りというかなんというか、

腰の下まで黒髪を伸ばし、赤い瞳をキョロキョロさせる、可憐な少女の姿があつた。

「んっ……………！」

そんな馬鹿な！ 俺は叫びそうになる。しかし、絶句したままの口は叫び声を上げることを許さない。

これは何かの間違いだ。こいつは最近話題の男の娘キャラだ！と、俺は自分に言い聞かせる。

服は初期設定なのか、ちよつと厚手のフード付き黒いワンピース。赤の装飾がカラーバランス的にピッタリかわいらしい。

ワンピース、つまり、ズボンなどはないではない。

精神的ダメージを増加させつつ、俺は決定的確認に移り、ある場所に触れる決意をする。

つまり胸とか。

「うげ……………」

確信した、このアバターは女だ！ なんかリアルの俺にない感触

がある！ 見た目まな板だから気付かなかった。

夏恋が休み時間にこっそり言ってたし、俺も攻略ウィキで確認したからこそ、この現象が信じがたい。

『異性のアバターの使用は、脳に深刻な影響を残すと熱地学院大学の調査で判明した。そのため法律で禁じられてる』、『故に、DPOでは脳波によって男女を見分け、アバターを生成する』

一時間程度に渡って調べたサイトの情報には、軒並みそんな情報があった。公式サイトも例外ではない。ログイン前に確認したさ、何度も。女アバター使えないのはちとキツイと思いながらな！

逆にこんな情報もあった、気がする。

『脳波の違いで男女を見分けるシステムだが、開発者の大川緋色氏は「多分、性別逆転事故とかあるかもね。多分だけどね（笑）」と言っている』

「開発者出てこい！ 前に出る、前だ！ ミンチよりひでえや！」  
こうして、俺はこの少女のアバターを外見から『墨炎』と名付け、恐らくであるが【ドラゴンプラネットオンライン】初の性別逆転プレイヤーとなったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7928z/>

---

ドラゴンプラネット

2011年12月25日15時57分発行